

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

LICENSED PRODUCT

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

Black

A

1

2

3

4

5

6

M

8

9

10

11

12

13

14

15

B

17

18

19

写真鏡圖說二編

完

洋学文庫

文庫 8

C 305

2

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

明治元年初冬刻成

寫真鏡圖說 第二編

柳河氏藏板 中外堂發兌

41-7850

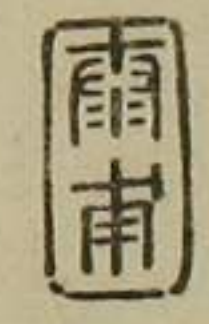
昔者竹君草一龜者。於正光之末也。就
吾問多矣。唯主能擇撰。嗚呼。久之
後曰。師人而何物。彼亦言之。不如買書也。而
其法必為書者。立德字正。德之。名。呂知西洋
買書之精。且捷。余嘗行楊子。由金雞橋
蓋。四葉。潘淋。清。多袖。為之。斑。如。不。深。多。編。有

寫真錄 卷二
者。後每覽月。若宮告祝前篇之祝。
故。為作之。後篇將改之。梓。為人來激。序。
余乃書。習之。獲陳。而主。若。公。而其。書。之。宋。
亦。出。於。雜。錄。中。也。則。其。由。矣。殆。者。與。夫。解。
之。如。此。官。相。似。而。其。致。精。微。之。道。不。細。會。懷。
而。已。矣。嗚。呼。楊。子。測。後。學。遠。濛。濛。一。魚。

善。初。象。華。札。自。利。在。矣。武。之。名。者。且。
軍。旅。韜。略。之。法。非。能。一。羅。其。胸。中。矣。
致。力。少。技。區。之。宮。告。者。將。又。主。公。西。人。之。技。
如。是。者。亦。抑。趨。時。嗜。投。任。好。而。補。區。通。一。技。
債。之。不。能。乎。陸。楚。是。書。一。出。家。謀。人。曉。則。
宮。真。之。術。也。者。能。極。其。妙。者。矣。不。知。孰。能。

為家以鏡以照楊子胸中一森然之字

者乎哉。諷交為人字子善溪



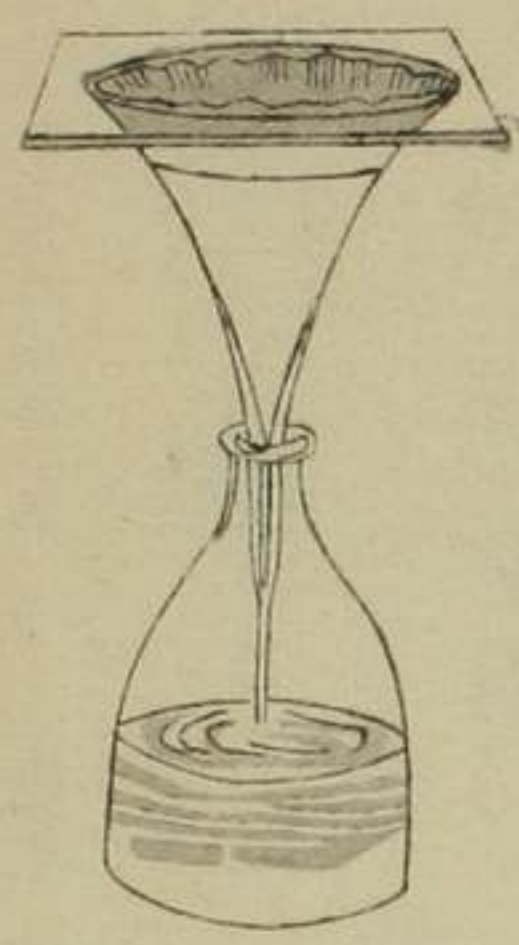
友人董園道人為書



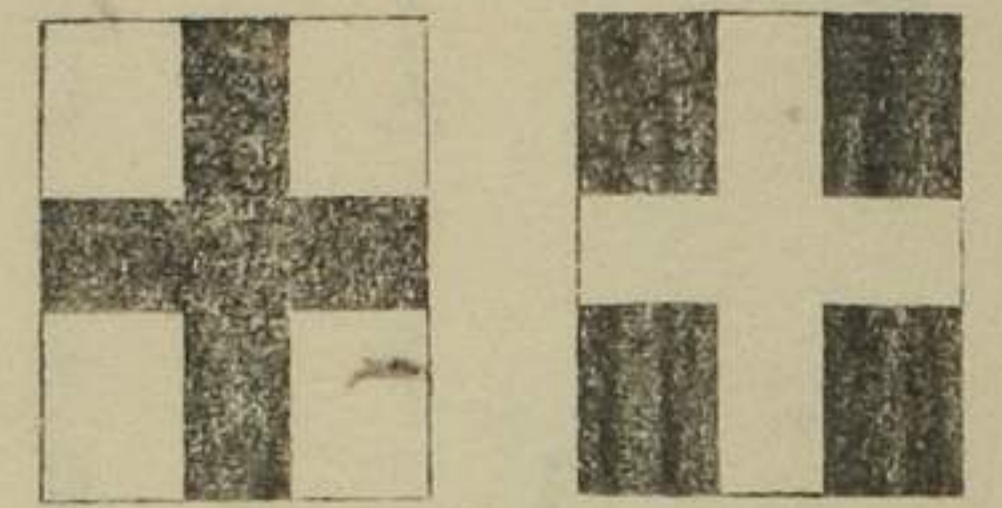
序

泰西奇巧之術。愈出愈奇。如寫真鏡者。可謂最奇而巧也。邦人講習之者。在今不暇指數。奈其於藥材。不知煉渡成奇。徒仰之於洋船。乃遭其一不致。則望洋束手而已矣。吾友楊大昕嘗有慨焉。官務之暇。自就洋籍。博求旁搜。不遺餘力。將極其源委。以盡之奇巧也。當其初下手。模糊不見涘涯。

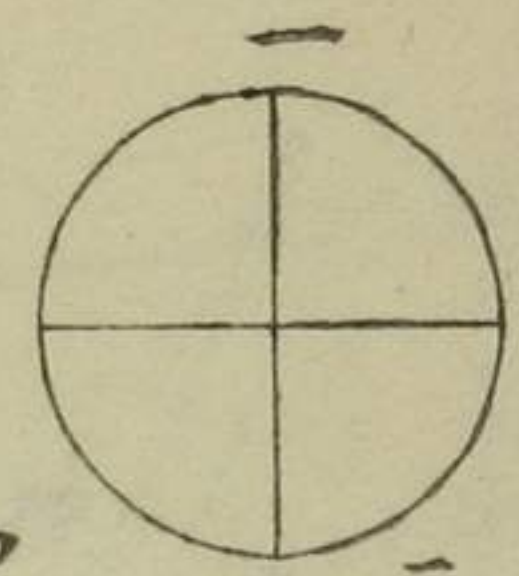
猶行五里霧中。一旦濶通。及于得其津路。然後藥材之精。不復竢於洋船所輸。大昕之勤可謂至矣哉。憾世之不解洋情者。槩以此等事。為恠竒淫巧。不啻妖魔視之。或以為害於世道。安知富强之端亦根于此耶。古人不云乎。寓用於無用。蓋是大昕之意也歟。刻成。因弁數言云爾。慶應丁卯夏五。紀伊三毛證。




業の形敷をいとし且
ほろりを避るなえビイ
ドロ板をおほひて濃まへし




陽画と陰画と
相反の形



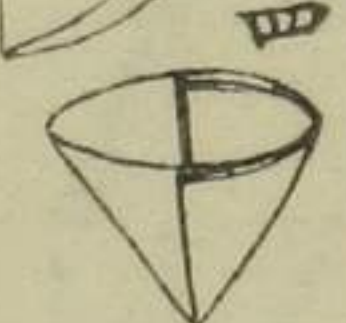
一



二




三




四

濃し紙のきりみ方



濃し器



又一法

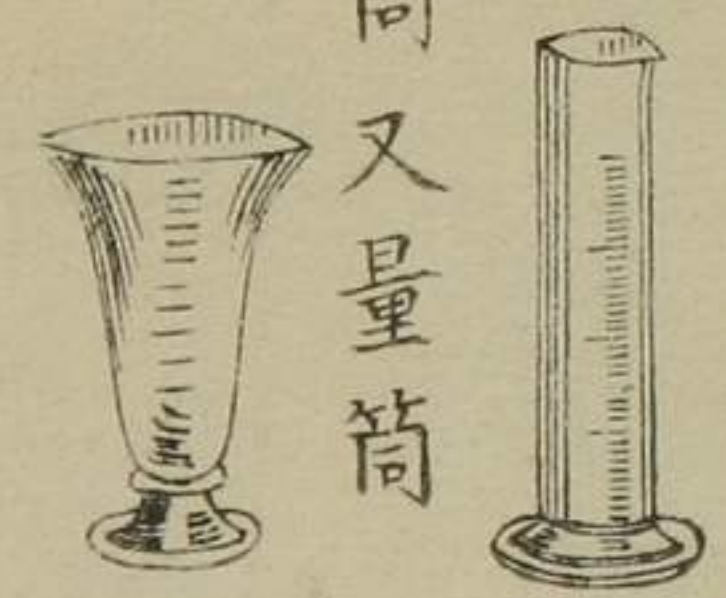
濃紙^{ニカハ}を糊^{ニカハ}膠^{ニカハ}なき紙を用ふべし
彼方より無膠紙あり

英名 ブロッチンペーパー
ドイツ名 フリースパピール
業名 フルワイパピール と云ふ

寫真鏡心

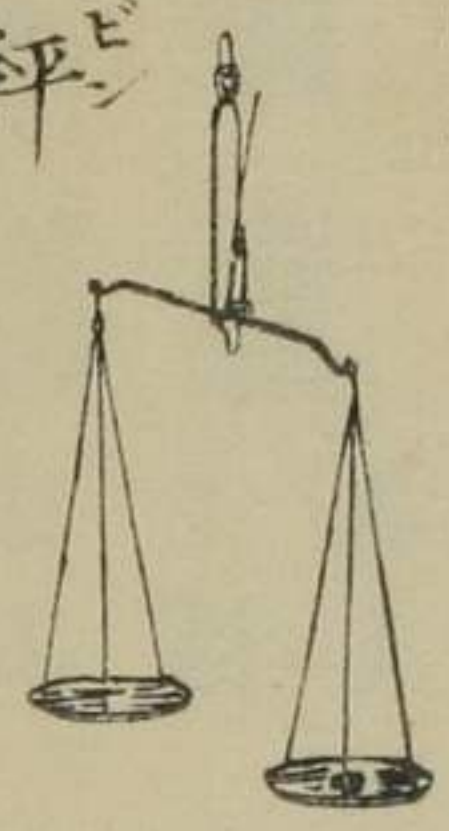
月一

試筒又量筒

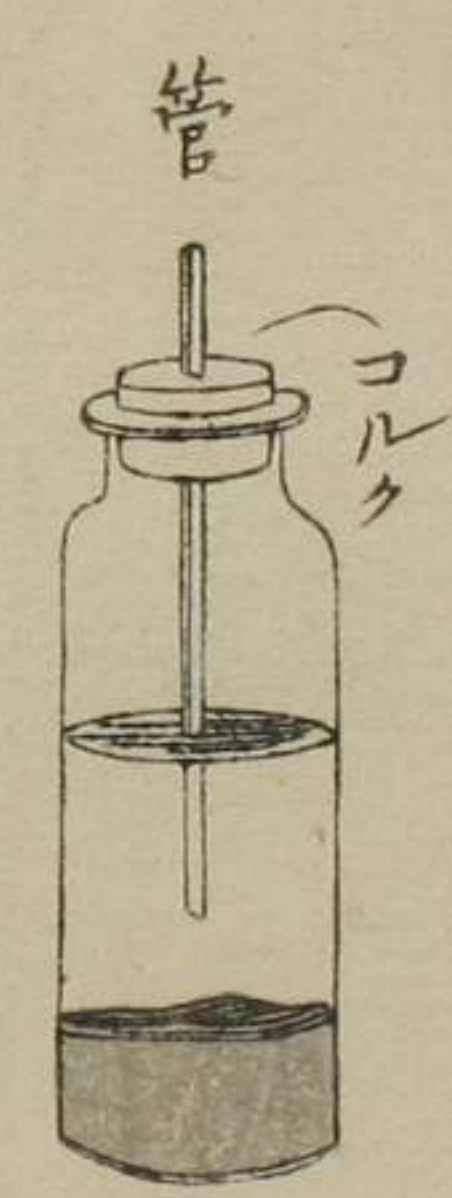


水をかかると秤を用ひざして目方を知らねば目をもりたるゆゑなり

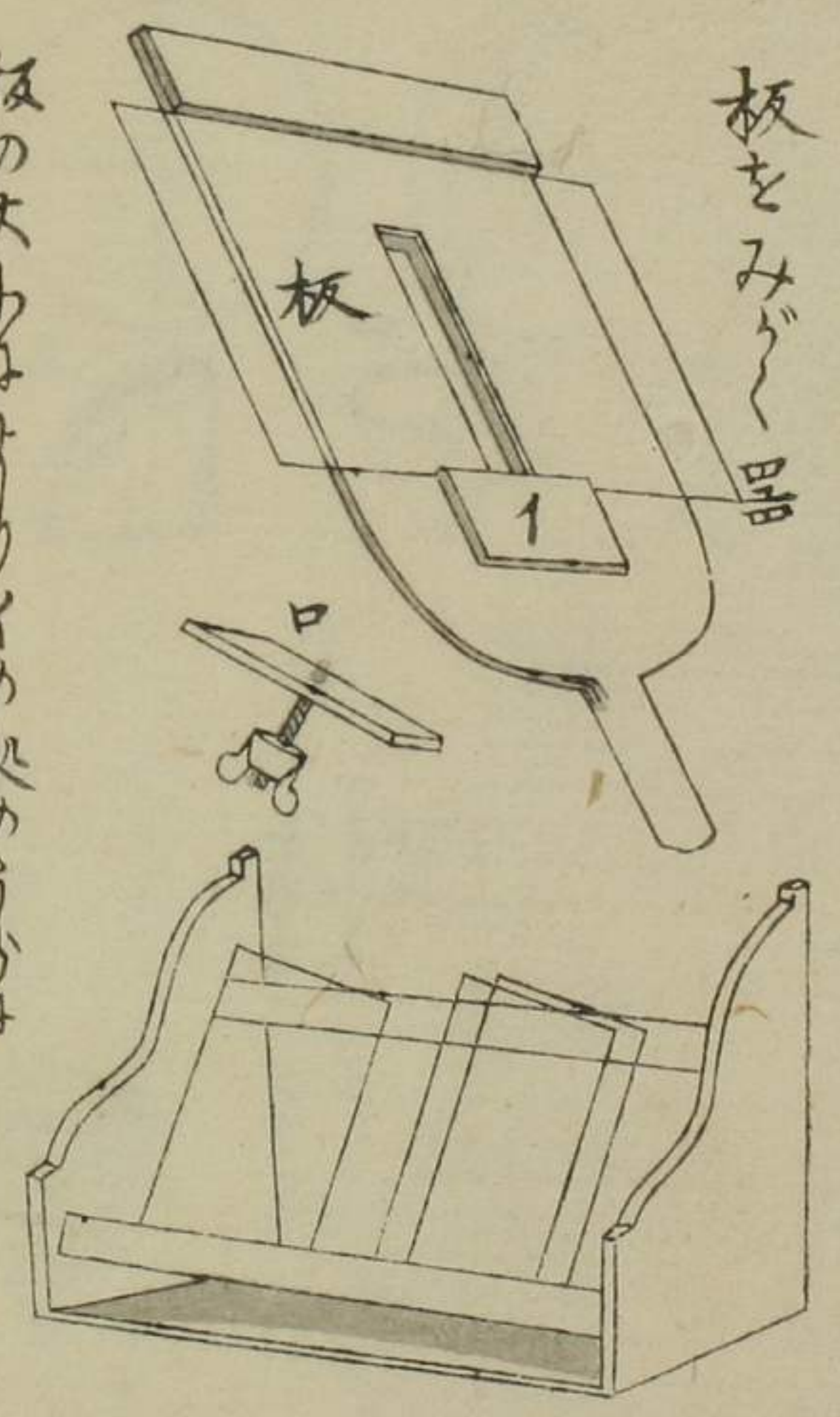
天秤



みがき薬を入る壺



みがき薬の板を掛る壺



板をみぐる器

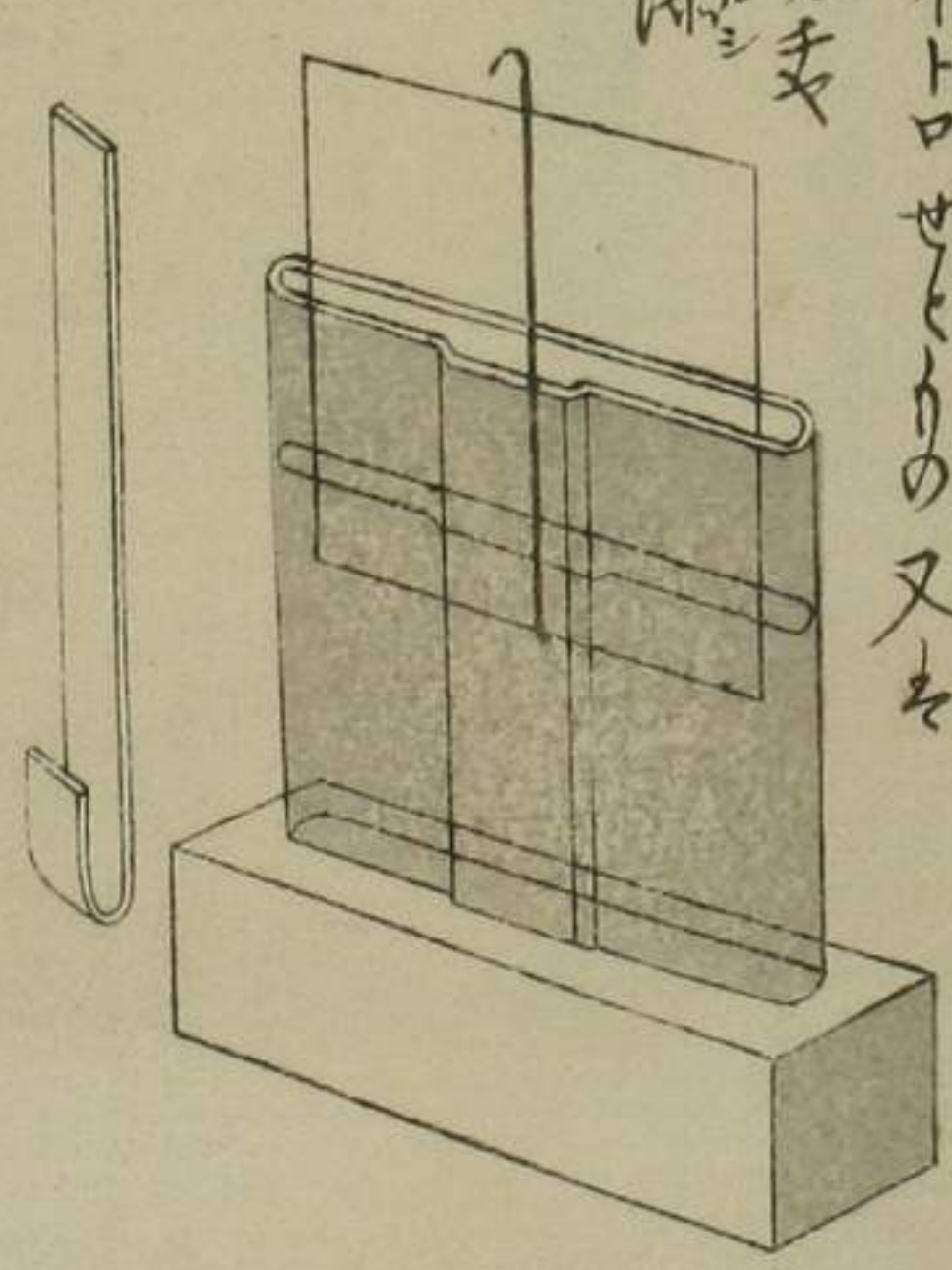
板の大小よりイの処のイの口の板を以てゆづりて止る

銀液の板をひいたる方

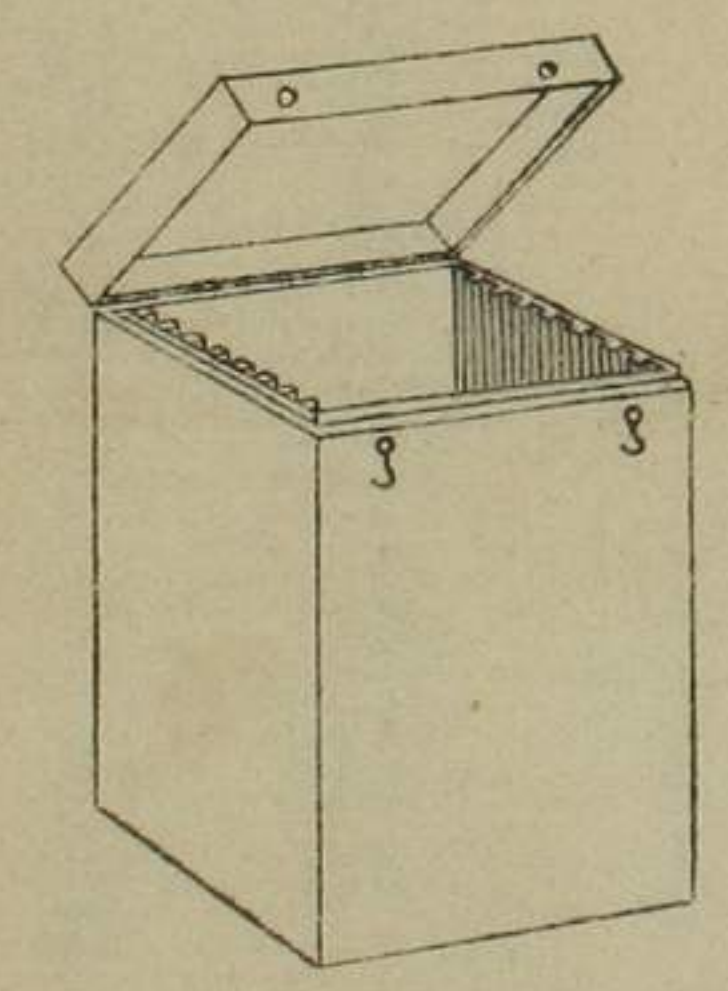


器をビイドロせしもの又をギッタヘル又を漆ぬす

鉤をいづれの形までも鯨鬚にて造るべし

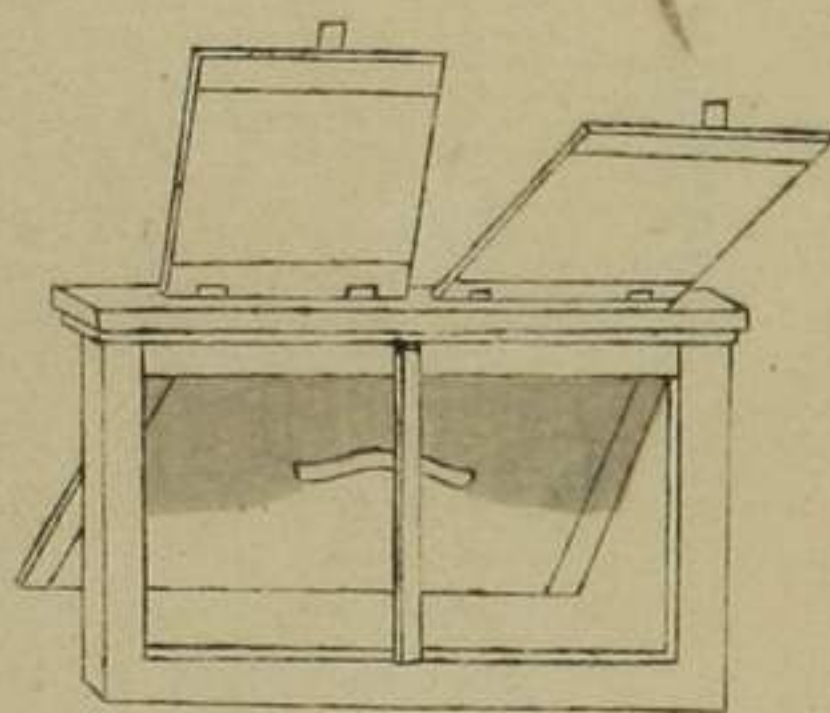
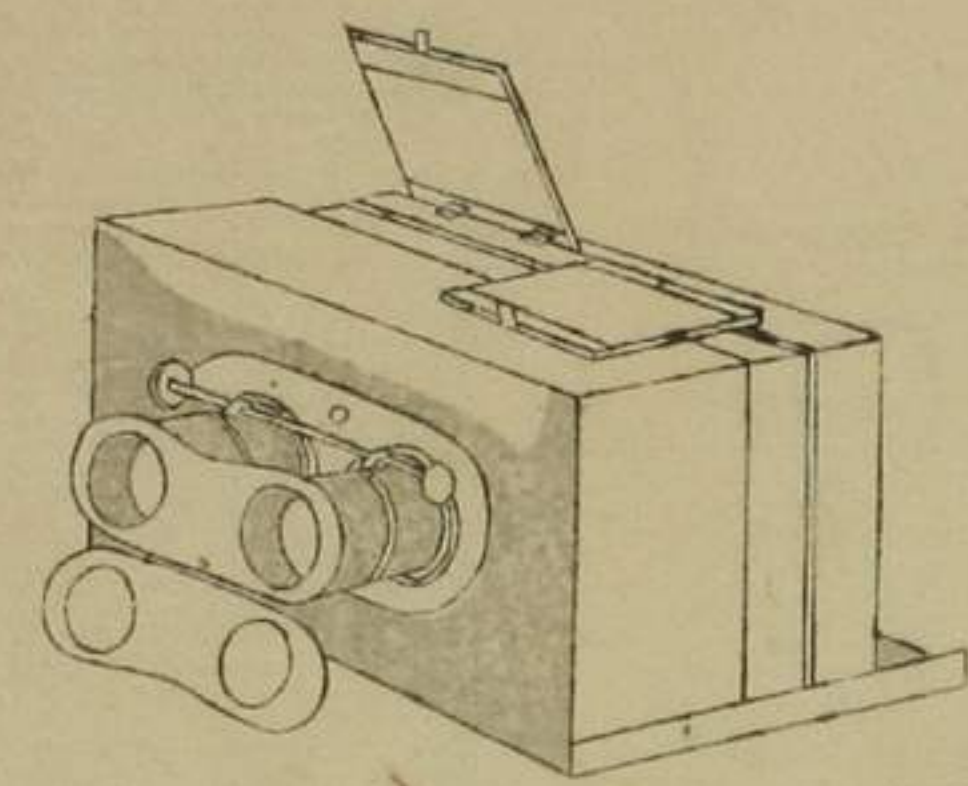


ビイドロ板を入る箱

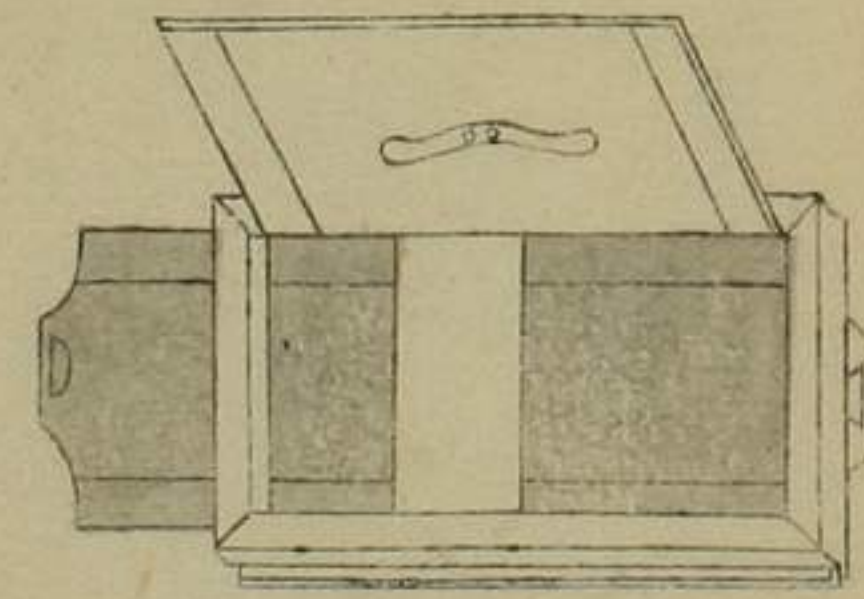


双眼ののぞき画を
製する暗箱

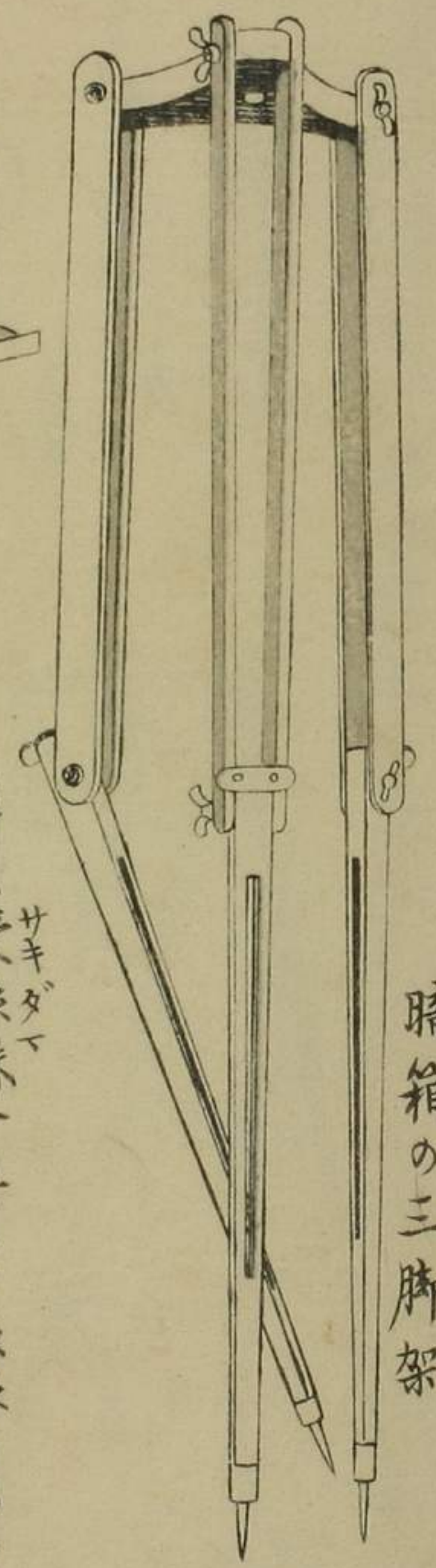
さきと
ニツを用あり



先づ左右
の内一方
をさき
次又一方
をさき

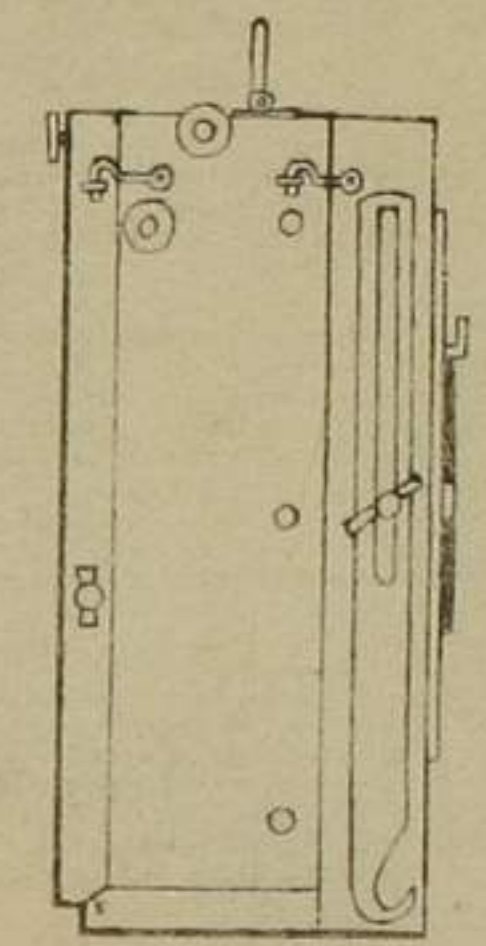
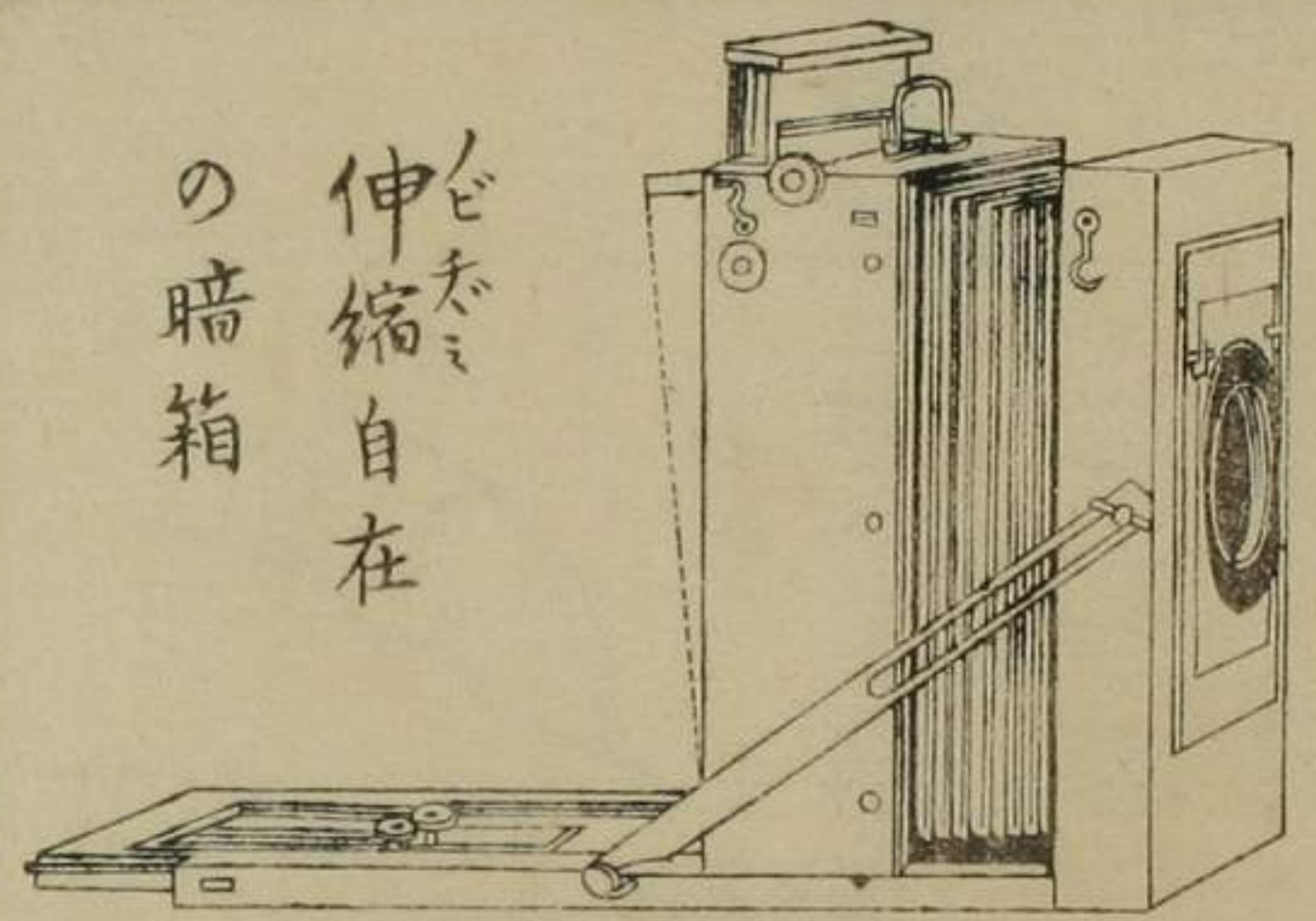


サキダマ
受象珠一具して双眼の画を製
するよも下の如きわくしき用

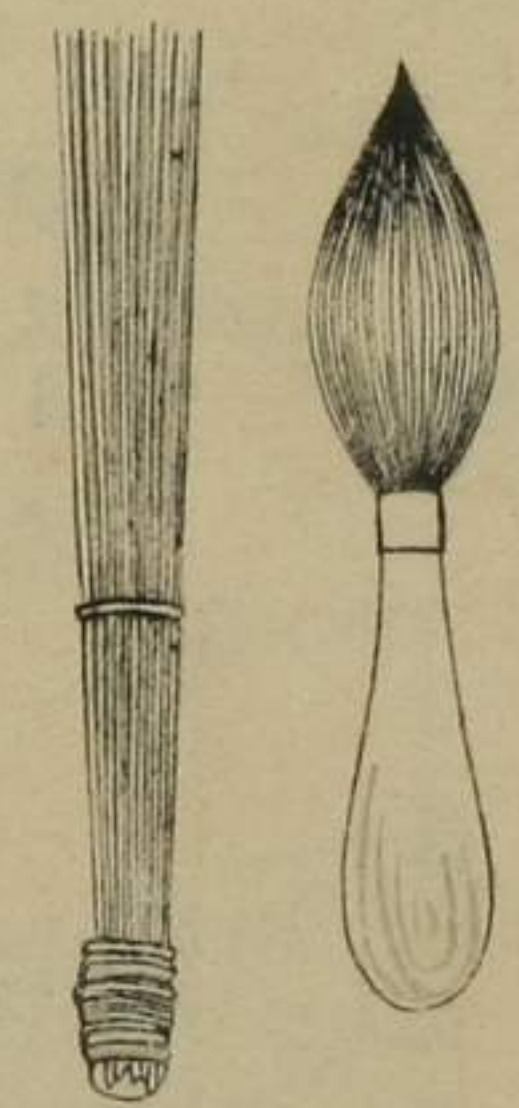


暗箱の三脚架

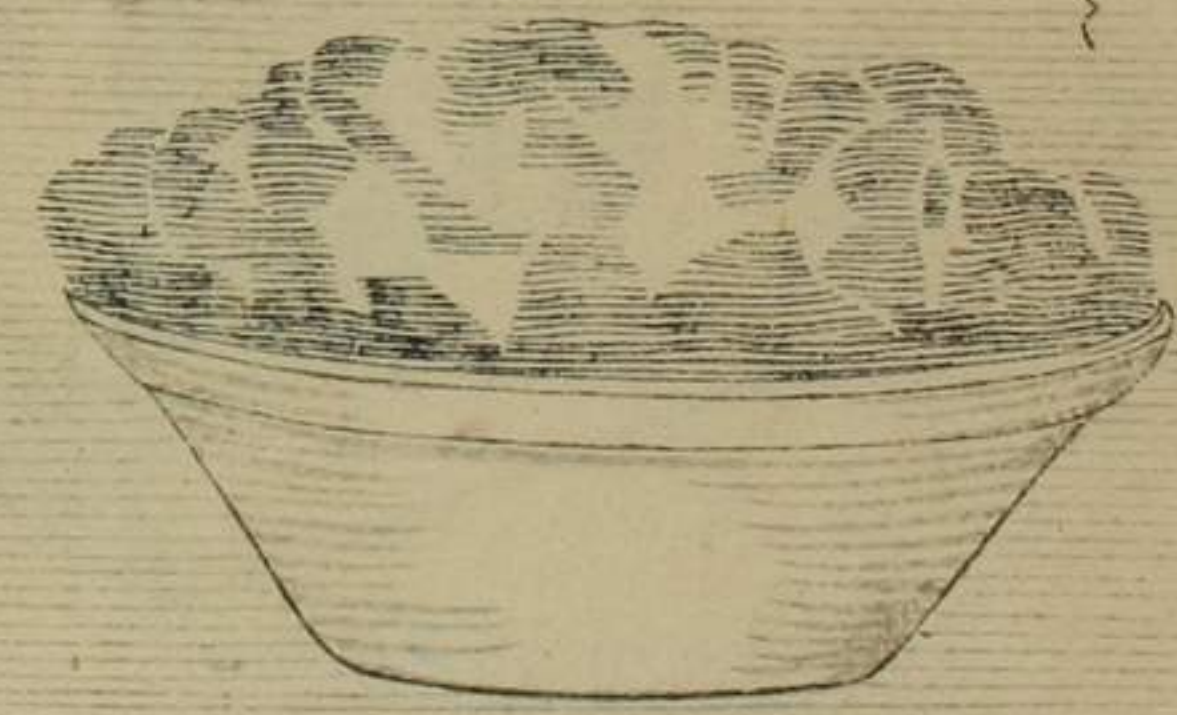
伸縮自在
の暗箱



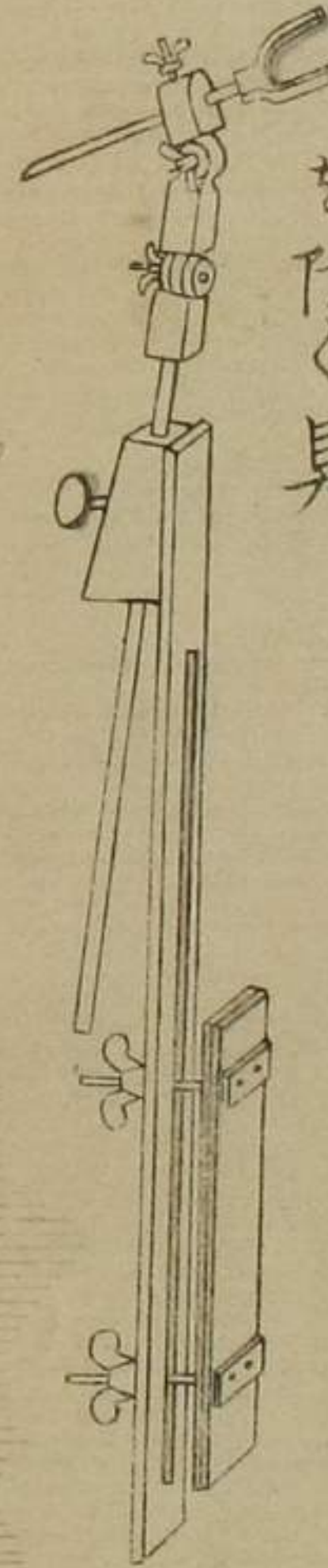
玉子をかきとる具



玉子の白みをかきとる
雪の如くあつる不



さきうけの後よまてて頭を擦へ動揺
を防ぐ具





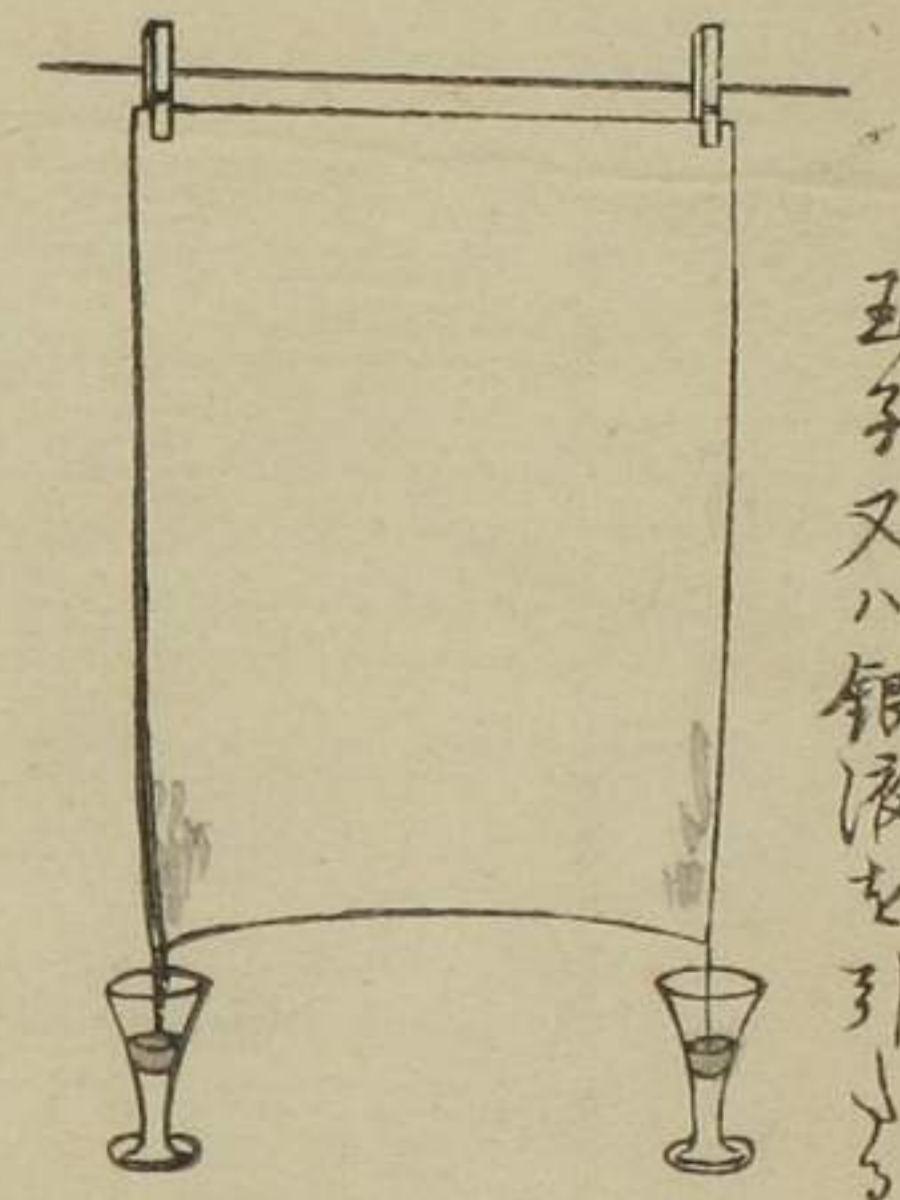
寫真鏡圖說二編

楊江柳河暎春三譯述



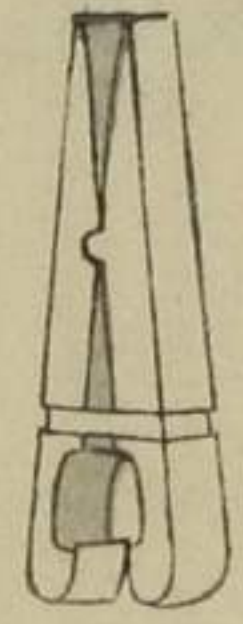
第一 寫真術の起原并は沿革の説話
 今より三百年前まで。画圖を寫はすは只筆を用ひし。意は任せて描くのみありし。天文弘治の頃。やありけん。以大判の那不勒國人。ホルタといふ者。初りて暗箱を發明を。
 暗箱。西洋の通名。ヤムブル。オブスクルと云

寫真鏡圖說 卷二



玉子又ハ銀液を引よる紙の干方

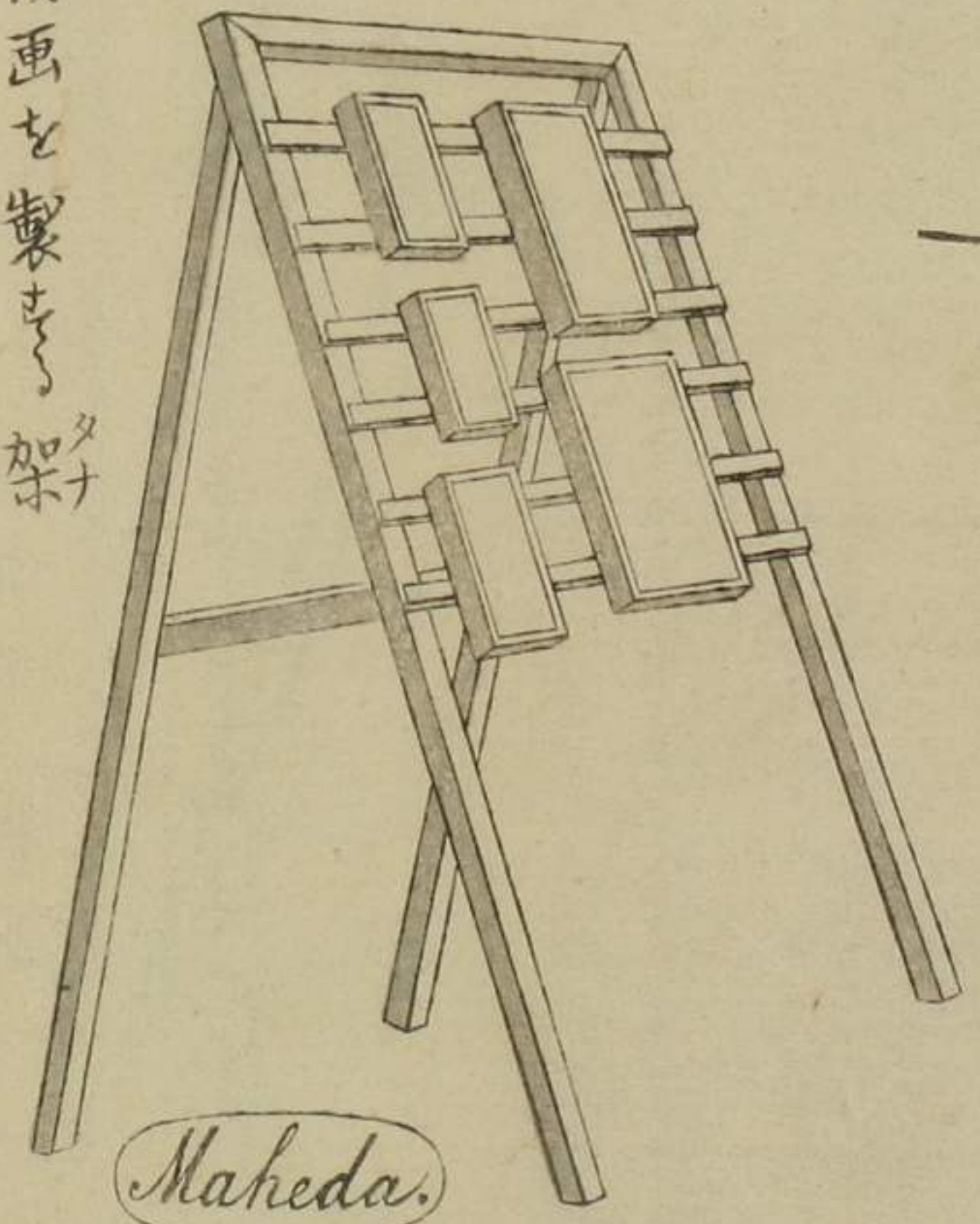
紙を掛る具



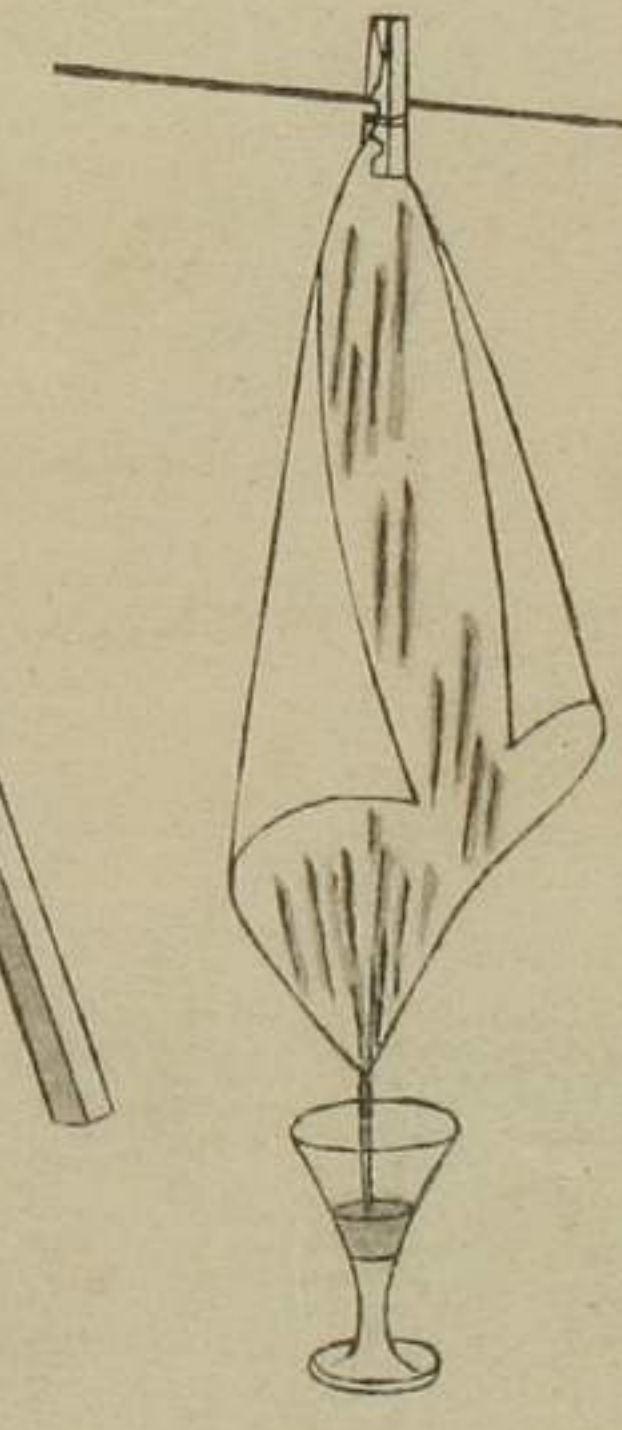
木

ハリガキ

紙の陽画を製する架



Maheda.



寫真鏡圖說 卷二

ひ。和蘭^{オランダ}のドンクルカールと云ふ。箱の前の方^ニ鏡珠^ミあり。底^ニ鏡^{カミ}を斜^ニ置き。其鏡の上の方^ニ不透明^{クモリ}玻璃^{ビイド}の版^{イタ}を置く。扱鏡珠の蓋^{フタ}を開けハ。物影箱の底^ニ在^ル斜鏡^ニ映^ス。輒^{スチ}ち不透明版^ニ映^スも^レあり。是^レを筆^ニて摸寫^スも^レと^モ知^ル也。何^レの物像^ノも^レ真形^ノの如^ク寫^シ得^ルら^ズあり。從來^ニ是^レを世^ニ寫真鏡^ト稱^スたり。然^レども。此暗箱^ヲ真形^ヲ摸寫^スる^ニ便^ナり

と雖^モ。是^レを再^ニ紙^ニ寫^シ取^ルる^ニハ。筆^ヲ勞^ハく煩^ハしき^ノ事^ナら^ズ。画事^ニ長^トし^テる^者は非^ズ。此器^ヲ用^フ事^能む。然^ルる^ニ明和二年^ニ有名^ノ化学家^{セーレ}氏^{偶然}コロール^銀の性質^見。日光^ニ觸^レバ。忽^チ色^ヲ變^ジる^事を發明^シたり。

コロール^銀と^モ。銀^ヲ消酸^ニ溶^ス。其溶液^ニ鹽酸^或食鹽^ノ溶水^トを滴^カ加^フレバ。忽^チ濁^リを生^ジ。器底^ニ沈^メる^{白粉}を云^フ。此

物古名鹽酸銀。又名角銀と云ふ。今も不純
もの銀を精製する為に此方を用ふ。即ち銅
の多く雜るるは銀より。純精ある銀を分ち
取らんと欲されば。是を薄く打延へ。細く切
りて消酸を溶り。水を加へて稍稀薄あり
し。多。食鹽溶水を滴し加ふれば。銀分も悉く
白粉となりて沈む。銅粉を皆青色の液中に
残す。扱此白粉。即ちコロール銀を幾度も水
に洗ひ。乾し。是は苛性加里 ベイトンズ
ポトアス

と木炭末を和し。或ハ蓬砂を加へ。坩堝ポトに入
す。紅熾の火度火色の鮮紅あるを云ふ。是よ
り強き火度也。火色白く見ゆ
る故に白熾と
名くるなり。あり。あま半時程。熾熱せしむると
成す。銀悉く還元して一塊とあるなり。此の
如く精製し。銀ハ極精好の者あり。何
の製劑にも用ふべし。
まぐろコロール銀のこゝ限らぬ。金。銀。水銀
等の製劑也。何れも日光を感ず。色を變じ。性
質も亦變化するなり。故に是等の諸金

属して製し、薬劑を青色或ハ黒色の器
に入し。暗處に貯ふ可きあり。寫真術を行ふ
は。藥液を暗室中にて取扱ふも只此理に因
るのみ。

其後程を経て諸國の學士。此コロール銀の日
光に感し易き性質を基づきて。これを有用の
技に施さんとして謀り。種々の經驗をあつ
た間。文化十一年法朗西國の學士ニセホー
ルニールプス。始めケポルタ氏の暗箱内を於て。

画像を寫し出を新方を考へ得しうども。其功
いまだ大成せざらん。かくて十二年を経て。同時の
學士ダキールと相謀り。初めて画像を製し出
せり。此時に玻璃版又ハ銅版の上面にアスハ
ルトを塗て。是を画像の下地とせたり。たゞ
僅に圖画を写し、そのみならず。末世に
公告せらるるに足らざらん。

アスハルト一名アールドベッキ又ビキムド。
ジデー 猶太國産の土と云ふ。黒色にして光
暗とく義

澤りり。外見ハ石炭の上品あり。者ニ類シ。碎
け易く。焚燒シ易く。エーテルニ容易く溶解
シ。いさよ由係黒琥珀の類あり。石炭の出る地
方を索りば。必ズ和産なりと云ふ。

アスハルトをエーテルニ溶シ。或ハ火力ニ
テ燂解流動せしめ。これニテレピン油を加
へて稀くし。者。即ち寫真術の用る黒
アルニスなり。其他アスハルトの用頗る多し。
天保十年ニ至りて。ニーフス。ダギョールの二人。

竟ニ銀版寫真の術を大成せり。其方平面ニ
テ磨き上げ。銅版ニ鍍銀をなす。此版を
ヂウムニの煙ニ薰ト。之を暗箱中ニ入れ。鏡珠ニの
蓋を開き。物影を受く。暗處ニ其版を
取出し。更ニ水銀の蒸氣ニ薰シ。画像を顯
す。終ニ次亞硫酸曹達の溶液を以て之を洗ふ。
此方ダギョールの氏の手ニ完成せり。故ニ稱し。
ダギョールオテピート云ふ。

ダギョールオテピーの方ハ。川本幸民譯本。遠

新編 萬國 通志 卷之二

西奇器述に詳あり。故に茲に畧し。

是と大抵同時に、ホクス、タルボットと云ふ人。暗箱中にて、紙に画像を寫し出を事を發明せり。其方を名けりタルボットといふ。之に續き、ニセホール、ニープスの甥あり。ニープス、デシント、ヒクトル、玻璃版に雞卵白、及び銀液を塗り、画像を製し出せり。其方をニープス、タイプと名づく。此の如く諸家競ひて、新方を考索し、鮮美の画像を製せんことを求められど

も、未、其極に至る、其能をば、或ハ画中明暗の分界判然とらざるに遺憾有り。或ハ衣服左袵の形をあらわし、文字を寫しても、亦背面の象をあらわすの不便有り。諸家尚良全の方法を講究し、幸あらう。弘化四年の頃、瑞士國の學士センバイン、及び日耳曼國の學士ベッセルの二人、綿花を以て火藥の代とあらべき物を發明し、これを名けり火綿俗名綿と云ふ。當時の化學家、即ち此火綿をエーテルとアルコオ

萬國 通志 卷之二

ルの和劑は溶解し。これをコロジョンと名け。醫
家より於て。火傷創傷ヤケドキリキズの藥とあり。此物大氣は
觸りて速に乾き、透明無色の膜皮ウスカハは化をるを
以て。ニールプス等の諸學士、これを玻璃版に塗
りて。寫真術に試用せしに。其佳好の圖を得る
支。雞卵白の比をぐきよらる。扱三四年の間
を経て。アルセル氏に至りて。コロジョン寫真の
式大に備ちり。従前ハ數十センチコンド。乃至幾
センチトより成り。画像僅に四五センチコンド

あり。功を成せしに至れり。是より於てコロジョン
寫真の法を世に稱し。アルセルタイプと云
ふ。

ダギューレオタイプ、タルボタイプ、ニールプソ
タイプ、アルセルタイプ。皆其人名より因て
稱するの名あり。此諸術を總稱して。ラトガ
ラヒーと云ふ。此語ハ元來希臘國ギリシヤの語。光
をラトと云ひ。書き寫以事を。ガラホと云ふ。
此二語を合せ。ラトガ者ありて。即ち光の力よ

寫眞鏡說 卷二

これに飽足らば種々の工夫をあたへ者あり。或
を大なる画像を一粟粒の大きさ縮め。或を小
き画像を廓大にして等身の像を製し。或ハ暗
夜に燭光を用ひて画圖を製し。或ハ乾きし
コロジョンを用ひて遠處を游覽しあぐら。風景
を寫しの便方を行ひ。或ハ鋼鐵。或ハ石版。直
に画像を留め。鏤刻の下繪とあるあり。各其
方法あり。次は逐て後編に譯出をべし。

第二 火綿の製法

(火綿) 英吉利名ゴントン 法朗西名

コットン プードル 荷蘭名シキートカトウシ

羅甸名ピロクシリ子 俗名綿焰消

火綿を製するの方甚多しと雖も。大要消酸を
用ふる也。消石を用ふるもの二種は過ぎば。其
方

消酸 純粹より最強き者 六十分

硫酸 英吉利製の者 五十分

英吉利硫酸と稱する者も。鉛の室中水

寫眞鏡說 卷二

蒸氣と消酸の蒸氣とを通ぜしめ。室中
て硫黄を焚し製す。此品無色透明なり。
大抵類重。水と比して一、八あり。水十
と十八あり。近年舶来多く。價も廉あり。購求
し用ふ可し。○我邦にてハ未だ鉛室を設
けて。硫酸を製するの藥局あり。故に硫酸
の價甚貴し。硫酸得難けれど。消酸塩酸等
も隨て得易なり。故に化學を盛に開
んと欲せば。先づ硫酸を多く製し出さ

急務と云

右二味を玻璃又をよく藥のかくりし
の内よく合せ。此内は綿花のよく打ち柔
あし者適宜。大抵を浸し。玻璃の箸二本
て綿を擴げて。藥液の平均無く浸入する様
とし。扱そのまゝ浸し置く事十五分ニ
り此ニシートを經し取り出す。水中
に投し。幾度も水を取替へて洗ひ上げ。終に水
少しも酸性を帯ぶ事無きを度とし。乾き

紙ヲ布片ヲ以テ濕^シを取り。尚風乾^シ貯^スふ。

洗水と雨水をよ^クと^クん。水清潔あ^らざ^らば。

火綿白色あ^らざ^らば。汚色を帯^フ。

此伎倆^ヲをあ^らざ^らば。煙突^ノの下^ニ。或ハ風の通

る椽側^ニ出^テ。布を以^テ鼻と口を覆^ヒて。製

法を行^フべ^シ。消酸の蒸氣甚^ド呼吸を妨^ゲ。

咳^ヲ嗽^ヲを發^スる^ノ患^{アリ}。故^{アリ}。

消酸の佳品無^キ時^ニ。消石を以^テ製^スる^ヲを好

し^トん^但。消石を最^モ純精^トし^テ乾^キし^テ者

を用^フべ^シ。坩堝^ヲ一^ツび^ニ。全^ク水^分

を除^キし^テ者^{アリ}。更^ニ良^キ。

消石粗末^ヲ

廿分

右を磁器又^ハ玻璃鉢^ニ入^レ。

英吉利硫酸

三十二分

を注^ギ。玻璃の乳棒^ヲよ^クか^キ中^ニ。混^合

し^テ稀^キ糊^ノ如^クあ^りし^テ中^ニ。綿花^一大^凡を

入^レ。箸^ヲ以^テ擴^ゲ浸^シ置^ク事^前の式^ノ如^シ。

消石と硫酸^ヲを合^スれ^バ。一^度甚^シく沸騰

熱を生む。其あまりは熱しる間ハ暫く
待ち。少し冷んとするに至て綿花を入れ。急
に箸で横ぐべし。手早くせざれば薬液の
不平均は依りて。綿の腐る事有り。心を用ふ
べし。

右の外は。分量の少しは異ある方あれども大
抵同方あれば略す。又西洋紙を以て綿花の代
り用ふるも。同ト火紙を得る事あり。

火綿も。火に近づけば忽ち火を引て焚ゆる事

極めく速く。其力火薬の如く。焚て燼を残り事
無し。水も焼酒も溶解せむ。只アルコオル
とエーテルの合しる者又のみ速く溶解を。
若し之は溶解難き者ハ其製の宜しきらざら
ざるなり。

第三 硝酸銀の製法

消酸銀 英吉利名 ナイツレートオフシルブル

法朗西名 アツタート、ダルザン 荷蘭名

サル、ペトルシールシルフル 羅甸名 ニトラス、アルゼ

ンチ 又 ラーピス、インヘルナリス

く人身を腐蝕する毒薬ある故に此薬強の

精銀 第一葉を還元し如く者

精浄ある消酸

三兩 七兩

右を合し餾水三四兩を加ふれば。忽ち沸騰して至熱とあり。溶解し。澄清し。少く青色を帯びたる液とあり。

液のあまりは青色あるを。銀は銅氣を含めらるあり。又液中は白色の塗を生じらる。消酸

純精あらば。呵囉を含めらるの徴なり。世は發烟消石精と稱する赤色の消酸を。純精の品はあらば。精製消石と稀硫酸とを以て餾し。者も。無色透明にして烟を發する事無し。

此液を重湯煎にして。徐くと水分を煮減させ。終は液の上面は薄皮を結生を。これを結晶膜と云ふ。此膜の生じらるを度とし。火より下し冷せむ。白色の晶を結ぶ。傾けて餘液を滴し。

陰乾^{カゲボイ}と。是を結晶消酸銀なり。其餘液ハ。再^ヒ重湯煎^セりて水分を減し。結晶せしむべし。

若し第二葉云へる如く。精製ししる銀あき時。別^ニ銀を精製する。一簡方あり。左の如し。

但し是れとひ精製の下地とせしむる可成丈上好の銀を用ふべし。然らざれば費多し

て得る所甚少し。西洋より多く通用銀の磨滅^{スレ}しる者を用ふ。銀の位各國同トク^レざれども。大抵秤量百匁の内。九十匁^{バカ}多少の純

銀を含む。依て精製を行ひて費少きあり。精製せんと欲する銀^少の銅^多を。廣き鉢^ハに入し。消酸^ニ適宜^{大抵}を注ぎ。是れと温むれば速

に溶解せり。急は溶けざれば。餾水^少を加ふべし。尤椽側の窓の下よりよく風の通る所

於て置くべし。扱此銀悉く溶け終りしるべし。更^ニ餾水^少を加へて稀くし。此鉢の内へ。よく磨^カき

し。銅の版^ハを入し。一晝夜静ある處に置きし後

後これを見れば。銀を悉く粉末とありて。銅版

の裏表ウラオモテに付き鉢の底も洗む。是を酸化銀粉あり。初銅を消酸に溶けて其秤量減し。液の色青く變ぢるあり。是に於て紙にて濾し。紙上に残る銀粉を幾度も餾水にて洗ひ。洗水復銅氣チヤを含む事あきを度とし。粉を取りて用は供を。洗水の紙より滴下する者を少く他の器に入受け。硃砂精一二滴を滴し見ふ。其水を酢こしすと青色を發する間も銅氣有りとは知るべし。銅氣無ければ青色を發する事無

きなり

其後此銀粉を消酸に再び溶かし。結晶せしむる事前法の如く。但し右の如くして製し結晶消酸銀を必ず過量の酸を帯びて。陰画を製するに佳し。故に鎔製消酸銀とあり用るを更に良し。鎔製消酸銀とは。消酸銀を坩堝レツポに入きて徐く火度を強くし。鎔解流動せしむると至れば。其含む所の水分。并に過量の消酸分。悉く飛散

是を磨きし。鍍の型を温め置き。其中に鑄
込て管の形とす。是を即ち醫家常用の地
獄石あり。

但し鍍製して管形とすは。最初より結
晶せしむるに及ぶ。重湯煎して乾くまで
熬りて可なり。尤陰画玻璃版を製するに
必し鍍製の者を用ふるを要すと雖も。陽画
の紙に用ふる銀液を。結晶消酸銀を用ひて害
あり。

第四 硫酸鍍の製法

(硫酸鍍) 英吉利名

ニルスト、オフ、アイロン

法朗西名

スルフォート、ド、マ

荷蘭名 スワ

トフルニール、エイズル

羅甸名

ニルリス、スリ

又サル、ニル、テイス

の義

緑礬も亦硫酸鍍を

れども純粹ありざる故に寫真術に用
ひ難し

硫酸
浄水

六分
廿四分

右一滴ツ、徐くと調合をぐ。急又二味を合を
れど。忽ち沸騰して動もすれば器を破裂し。人
の眼口皮膚を掛うりて腐蝕をの患あり。硫
酸は水を合をるを極めて用心をぐきなり。扱
此稀くして硫酸の中へ

鏡の鑢屑

四分

を加へ。玻璃の箸を頻にかきまを。重湯を
て煮る。此の如くすれば。水素瓦斯飛散し。
鏡全く溶けり薄青色の液とある。此液を濾し。

尚熱きよ素トを硫酸四分の一を滴加し。冷處を
二三日放置をれば。鮮美淡緑色の晶を結ぶ。傾
けて上澄を去り。漉紙の上より乾う。強きア
ルコオルの中へ貯ふ。

アルコオルをとりて硫酸鏡を溶を事無
し。故又其内を貯へ置けむ。年月を経ても損
を事無きなり。然らざれば空氣を觸れて。
外面漸く黄色を變し。其性も亦隨て變ら
故あり。若し貯へ方悪くして黄色を變ト

硫酸鍍を復^ナ良^ホして用^リんと欲^セば之
を湯^ニ溶^ス。濾^シて後^ニ硫酸少^クしを滴^シ和^ス。少
し煮^減して放^冷すれど。復^鮮美^ノの品^ヲを結^ぶ
採^りて用^ふべし。

其餘^ノ液^ヲを煮^て水^氣を減^ス。冷^サせば復^前ノ如^キ
品^ヲを得^べし。此^ノ如^ク製^まれど。大^抵鍍^四分^ヲ
以^て硫酸鍍^十六^七分^ヲを得^るあり。

硫酸鍍を煮^るは銅^鍍ノ器^ヲを忌^む事^ヲ勿^論
あり。其他^ノ製^劑も大^抵玻^璃又^ハ陶^器を

用^ふと知^るべし

第五 酢酸の製法

酢^酸 醋^酸 同^ト 醋^酸 二^字 共^ニ 音^音 英^吉

利^名 アセチク、アシド 法^朗 西^名 アシ

ド、アセテウ 荷^蘭 名^アゼイン、ヒール

羅^旬 名^アシダム、アセチキム

酢^酸 一^斤を製^まる^るは。大^抵水^三斤^半より四
斤^も入^るべし。頸^ノの長^キレトルト^ヲを用^ふ。其^方
酢^酸 鉛^即ち鉛^糖 細^末 十^五分

右を先づレトルトに入れ置き。次は

硫酸四分と水三分を用心して合せしむ者。

是をレトルトの中は注ぎ。静に振盪して。よく

合和せしめ。扱レトルトの口を受器に接ぎ。

但レトルトの頸は紙を巻き受器へ

挿し込むべし。是より透き間を塞ぎ。一

よを破裂を防ぐ為あり。

砂火の上せ。受器を桶の内へ入れ。注水管の仕

掛りて断えぐ之を冷やも様として蒸餾せられ

と。酢酸一滴づゝ受器へ出。終レトルトの内

より白色の硫酸鉛のみ残り。得る所の酢酸大

抵九分なり。

受器を冷を事よ心を用心せざれば。必ず破裂

の患ありあり。

いまゆる氷状酢酸を。硫酸と水を和せしめて。

鉛糖を合し蒸餾せしむのあれども。製法極め

てむのうら。初學の手は附をべうらび。且寫

真術を用ふ。本文の如き常の酢酸を用ひ

て足れりといふ。故に氷状酢酸の製法を説明せ
る。

第六 焦木酸の製法

(焦木酸 英吉利名ピロリノウス、アシ

ド 法朗西名アシド、ピロリラク又併

名アサダ、ボア木酢の義 荷蘭名ブ

ル、ラン、グ、ハウト、ヒール、又ハウトアゼ

ル、アイン、蘇羅甸名アシダム、ピロアセチキ

ム、アム、アシダム、ピロリチウム、其他異名

多し皆焦酢酸或は焦木酢等の義あり

何の木よりとも細き屑片とす。レトルトに入

ると乾餾せられど燃ゆる尾斯と木酢とを生じ。

只木の質堅實なれば水分少くし木酢強烈

あり。此木酢を焦木酸とも稱するあり。

木酢は酢に比すれば酢酸を含む事甚多く。強

烈ありと雖も焦油、ケレオソト、テール等を含

みて純精あり。但しケレオソトを含めらる

故に齲齒の痛に効り。又能く防腐の功あり

と云ふ。之を精製すれば亦酢酸を得べし。

寫真術の鍍液又用るりのを。蒸餾しつゝ儘
漉して用ふべし。但し鍍液又ハ之を用ひざ
る別方多し。

第七 コロヂヨンの別方并又加減の法
此書の初編又記しつゝコロヂヨンの方を。イッヂ
ウム劑と火綿とを。始めより合せて製するの
方あり。然るに貯へ方の行届らざる等より。後
より次第又損敗しつゝ用又立ち難く成る事

あり。尤も寫真術を渡世する家よりハ。日々藥
の遣ひ方多き故。損敗するを久く貯る事無
かれども。好事の入偶。此術を試すまを少トツ
調合して用るを便利せん。且チヂウム劑。プロ
ミウム劑を時として其品缺乏する事もあれ
也。別方をし経験し置き。臨時の用又備ふる
をよりとん。故又イッヂウムを加へて貯ふ
る常方無色コロヂヨンの方を左に記し。
常方コロヂオン洋名ノルマール、コロヂオンと云

其製法。

乾きくろ 精好の火綿 十八分

水分を離れくろ 至強アルコオル 三百五十分

右先づよく 拌和カキマゼし其後左の二味を加ふ。

類重〇、七一五の亞的兒ユイテ 四百分

水分を離れくろ 至強アルコオル 四百分

右調合されば直又溶解を。是れ即ち常方コロ

ロンビンなり。壘ビンの口を固く封じ貯めべし。

但し右の方を。アルコオルもエーテルも極

りて強き者を用ふ分量なれども。アルコオ

ルの強品を得易しと雖も。エーテルの至好

の品或は得難き事あり。その時もエーテル

の分量を増し。アルコオルの量を減して。製

を可し。

常方コロロン又イヨヂウム劑を加ふ諸方左

の如し。

○リチウムコロロンの方

水分を離れくろアルコオル 百分

イヨードリチウム 六分

ブロムカドミウム 二分

イヨードカドミウム 六分

右溶解し貯へ。此液一匁を常方コロヂオン十匁と合和し用ふ。

○ソヂウムコロヂオン一名ナトリウムコ

ロヂオンの方

水分を離れしアルコオル 百分

イヨードソヂウム 八分

イヨードカドミウム 三分

ブロムカドミウム 四分

右溶和し。常方コロヂオン十匁毎に此薬液一

匁を加ふ。

①アシモニウム劑を用る方

常方コロヂオン 十分

イヨードアシモニウム 十分

フロムアシモニウム 一分二厘五毛

右溶化を

○亞鉛を用る方

常方コロヂオン

一千分一厘五分

イード亜鉛

十二分

右溶和也。此方を銀液の為に利ありげと云て近来多く用ひむ。

往年も専らイードカリウムを用ひし。近来諸種の藥品を試験しイードアンモニウム。イードカドミウム。イードリチウム。イードソヂウム等を以てイードカリウムに勝れりといふ。

且プロミウム製劑を合せ用れば更に良しと云ふ。或は曰。光の感受力を速よむることをアンモニウム劑をよしとす。コロヂオンの性の損敗せざるが為にはカドミウム劑を佳とん。右の諸方の外をばてイオヂウム製劑も皆常方コロヂオンに加へて以て寫真の用は供よむべし。只其藥力の強弱同トウとざる故に加減の分量を記す。事左の如し。
大凡常方コロヂオン一千分よ加ふべき分量

寫真鏡 卷二

イヨードカリウムを 十三分三

イヨードバリウムを 十四分九

イヨードカドミウムを 十三分七

イヨードソヂウムを 十二分

イヨードカルシウムを 十一分八

イヨードアンモニウムを 十一分六

イヨードストロンチウムを 十四分六

イヨードマグネシウムを 十一分二

イヨード亜鉛を 十二分七

イヨードナトリウムを 十分九

イヨードニッケルを 十二分五

イヨードチウムを 十分七

イヨード鉄を 十二分三

尚經驗に依て加減をぐり 五百分

第八 銀液以下諸劑の別方

此方を普魯士國人の著書より抄出を。

まづて調合の仕方。大抵初編と同じき

故に文を略す。

寫真鏡 卷二

○陰画の銀液方

消酸銀十匁 蒸餾水百匁 大に溶解し終り
て後、醋酸十滴乃至十五滴を加ふ。

○鍍液方 (ありきり薬)

硫酸鍍 廿五匁 蒸餾水 五百匁 酢
廿五匁 アルコオル 十匁乃至廿匁

此液百匁毎に左の薬液十匁を加ふ
右の鍍液に加ふる液を。酢酸曹達を十倍の蒸
餾水に溶しつゝのあり。

○鍍液又方

硫酸鍍 五十匁 蒸餾水 八百匁至一千
匁 没食酸の飽和溶液 五匁 橙酸

五分 酢酸 廿匁 トケルダケトカシタルモノ アルコオル 三十匁

○没食酸液方 (強り薬)

蒸餾水 二百匁至三百匁 焦没食酸 三
匁 橙酸 一匁

○没食酸液に滴加する銀液の方

蒸餾水 百分 消酸銀 四分 或を更し

橙酸四分を加ふ。

○洗ひ上げ薬の方

水一千分 次亞硫酸曹達 五百分

○フルニスの方

至強アルコオル 八十分 ゴムスック シケ

クと八分 サンダラク 一分

○画を洗ひ上げて後更ニ薬力を強くし。

和知像を鮮明にして紙へ移寫するに便し

○この薬方。

イヨヂウム 一分 一ヨードカリウム 一分

水 五百分

此液を以て画像を洗ひ。更ニ復焦没食酸液を注ぎ掛る事。前の如くより。終ニ水洗ひ。

○又一方

升頭 俗名ヨピル 一分 蒸餾水 十分

此液を版ニ注ぎ。或は硫化アンモニウム液を注ぎて黒色を得るに至る。

其他卵清紙。澱粉紙の諸薬方。及び此卷ニ洩す

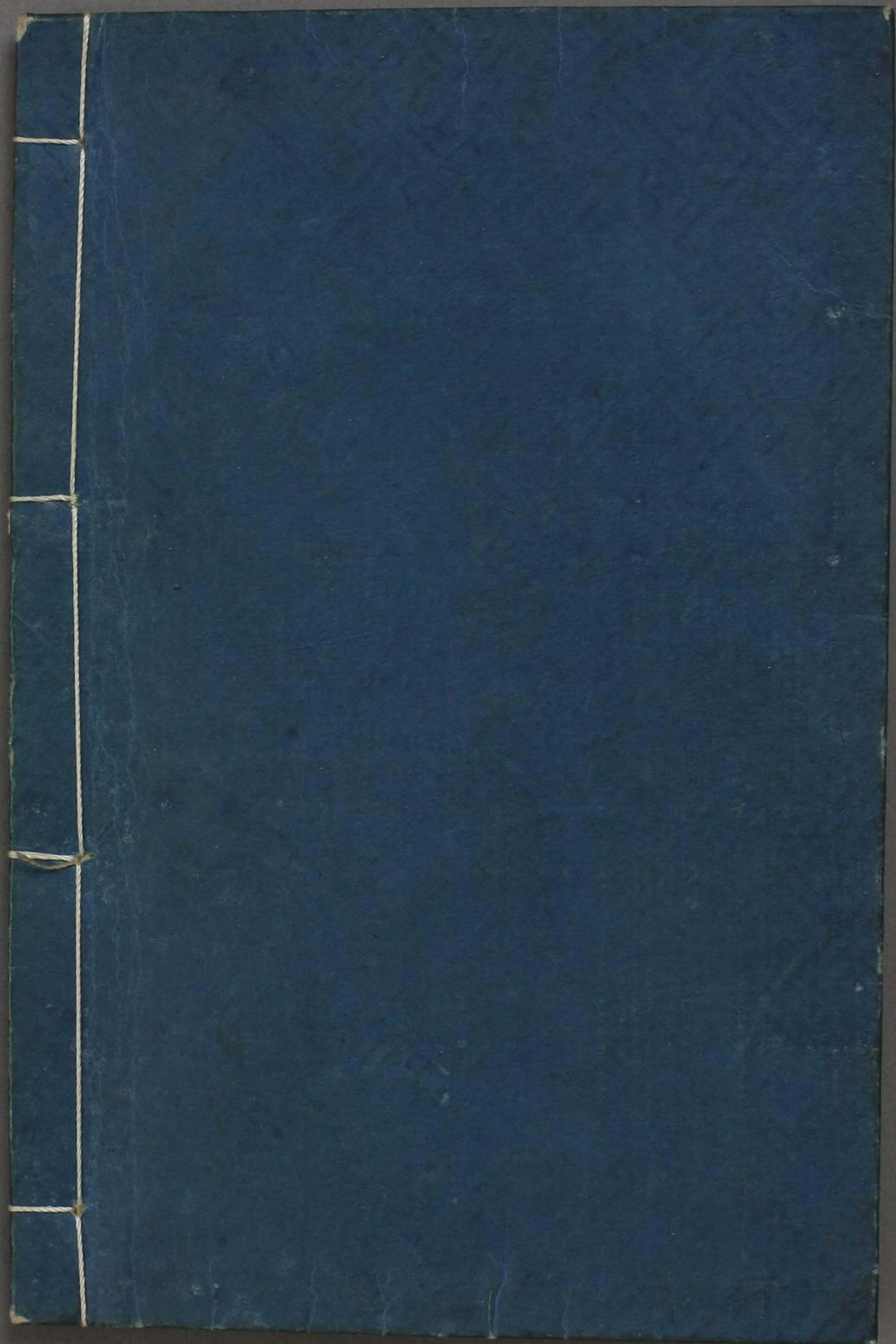
諸藥の製法也。近日三編の嗣刻を期し。

寫真鏡圖說二編終

明治二年新春發兌目錄

東京本町 上州屋總七
四丁目

西洋軍制	二冊	西洋雜誌	追々出来
英國刑典	三冊	柳園叢書	同
亞彼西字樣	一冊	中外漫筆	同
英吉日用通語	一冊	ういまゐい	同
佛学階梯	一冊	洋學便覽	同
十一國語箋	四冊	西洋將基指南	駒若 一冊
萬國新話	追々出来	算法珍書	一冊



明治元年初冬刻成

寫真鏡圖
說第二編

柳河氏藏板 中外堂發兌



西日本橋
洋面市
畫
儀